

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13411

研究課題名(和文) 19世紀末～20世紀初頭のイギリス小説における南海の 島嶼文化 と越境

研究課題名(英文) A Research of "Islands Culture" and Cross-Bordering in the South Sea in the 19th-20th century British Novels

研究代表者

松田 幸子 (Matsuda, Yoshiko)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：10575103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀から20世紀初頭にかけて、大英帝国が南海(South Sea)に進出する中で、イギリスの作家たちはそこで様々な接触・衝突・交渉を行った。ラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling)や R. L. スティーヴンソン(Robert Loise Stevenson)らの、東南アジア・南洋を舞台とした小説と、同時代の日刊紙(Civil and Military Gazette)を並行して読むことで、南海の 島嶼文化 とは避け難く混濁性を有したものであることが明らかになった。南海における 島嶼文化 の持つ非境界的な意識は、自らの境界を拡大していこうとする西洋の試みに抵抗するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大英帝国が自らの領土を拡大していこうとする過程において、遭遇した非境界的な 島嶼文化 との衝突や交渉を通して、帝国の境界に対する意識が変容する様を明らかにするという意味において、本研究は、近代国家におけるナショナル・アイデンティティに関する社会的・歴史的な問題と、相互作用的にその生成に携わったであろう小説というメディアの関係を探る、文化史的な視座を持った研究となった。とりわけ、キプリング、スティーヴンソンの小説が、 島嶼文化 との接触によって、西洋の混濁的なアイデンティティ形成の過程を明らかにするものであることを論じることができた。

研究成果の概要(英文)：From the 19th century to the beginning of the 20th century, British writers engaged in various cultural and social contacts, conflicts and negotiations in the South Sea, as the British Empire advanced there. By reading the novels in Southeast Asia and the South Sea, such as Rudyard Kipling and Robert Louise Stevenson, with some contemporary newspapers like The Civil and Military Gazette, the project has shown that Cultures of Island inevitably has a hybrid nature. The non-boundary consciousness of Cultures of Island in the South Sea always tried to resist Western attempt to expand its boundaries.

研究分野：19世紀イギリス小説における南洋表象

キーワード：南洋表象 島嶼文化 ポストコロニアリズム

## 1. 研究開始当初の背景

本研究においては、同時代的に東南アジアではなく、南海 (South Sea) あるいは、南太平洋 (South Pacific) と呼ばれ、現在でいうところのオセアニアの島々とも深いつながりを持っていたこの海域を「南海」と位置付け、これまでのイギリス小説史のなかでは語られなかったこの海域の 島嶼文化 について論じる。本研究は 島嶼文化 との接触によって 西洋 に非境界的な価値観が導入されることを明らかにする。逆説的ではあるが、自らの領域を拡大しようとする試みの中で、イギリスは、その境界が侵犯される不安を経験したのである。本研究は、単に帝国の作家たちを帝国主義者・植民地主義者として断罪するだけでなく、彼らを非西洋との接触の結果変容した 越境者 として位置付け直そうとする 2000 年以降の作家研究を踏まえ、南海という海域を舞台とした一連の小説群を 島嶼文化 の観点から読み直し、そこに表出している非境界的な価値観を明らかにしたい。

## 2. 研究の目的

19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、大英帝国が南海 (South Sea) に進出する中で、接触・衝突・交渉を行ったと考えられる、この海域の 島嶼文化 が、同時代の雑誌・日刊紙といった定期刊行物において発表された大衆的な小説の中に、どのように書き込まれているのかを明らかにする。とりわけ、南海における 島嶼文化 の持つ、非境界的な意識が、自らの境界を拡大していこうとする西洋列強の試みに、どのように影響を与え、結果的に、大英帝国の境界意識がどのように変容していったのかを、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての南海を舞台とした海洋小説・冒険小説から探る。

## 3. 研究の方法

南海を舞台にした 島嶼文化 との遭遇・衝突・交渉を描いたと思われる 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての小説を分析し、大英帝国の境界についての意識の変容を明らかにするという研究目的を達成するために、本研究では、次の方法を採用した。

### 1) 資料収集・調査

大英図書館・スコットランド国立図書館に赴き、19 世紀末から 20 世紀初頭に発表された南海を舞台とした小説を網羅的に調査した。19 世紀末のイギリス・アメリカでは、出版文化の爆発的な広がりによって、数多くの大衆向けの雑誌が出版された。その中には、現在ゆるやかに定義されているところの海洋小説・冒険小説以外にも、時に探偵小説・怪奇小説として、南海を舞台とした小説が無数に掲載されていた。『ストランド・マガジン』や『ユニオン・ジャック』、『マクルーア』等を確認し、南洋を舞台にした小説を収集することができた。また、イギリス統治下のインドで出版された日刊紙 *Civil and Military Gazette* を網羅的に読み、東南アジアについての記述を収集した。

### 2) 分析・解明作業

上記の資料収集・調査を元に、南海小説のなかで、 島嶼文化 との遭遇・衝突・交渉がどのように描かれているのか、また、その過程において、大英帝国の境界への意識に、どのような変容が生じているのかを分析した。調査の結果リスト化した南海小説を、 島嶼文化 という観点から分析することができた。その上で、そのような、南海の 島嶼文化 における境界に対する意識が、19 世紀末から 20 世紀初頭に書かれた小説の中に、魔術・貨幣といった隠喩を通して書き込まれていることが明らかになった。

## 4. 研究成果

平成 29 年度は、研究発表「キプリングと *Civil and Military Gazette*: 南洋と 島嶼文化 」において、南洋の登場する 3 作品を扱うとともに、それらに越境者としてヨーロッパ人や中国人が登場することをまとめた。とりわけ“*The Lang Men o' Larut*”に登場する「ラルート」という町について、本来 *The Civil and Military Gazette* で話題になっていたはずの中国人を登場させず、スコットランド人が語りを中心にしていることから、キプリングが同時代の東南アジアへの関心に注目しつつ、そこに物語的な操作を加えていることを明らかにした。

平成 30 年度は、東南アジアの 島嶼文化 における越境のありようが、どのように 19 世紀のイギリス小説でえがかれているのかという観点から、キプリングの小説の分析と、キプリングが参照したであろう同時代の植民地インドにおける新聞記事を調査した。とりわけ、東南アジアに言及したキプリングの短編小説“*A Smoke of Manila*”と“*The Lang Man o' Larut*”を読解することによって、19 世紀末のイギリスにおいて、東南アジアの島々が、イギリスやスペインといったヨーロッパの宗主国のみならず、インド、中国、アフリカ、南アメリカといった多様な文化の交差する場として描かれていることを確認した。また、このような越境性を同時代のイギリス小説が東南アジアの島嶼に見出していることを踏まえて大英図書館において、資料収集・調査を行った。特に、キプリングが編集に関わり、また参照したと思われるインドで発行されていた英語による新聞である *The Civil and Military Gazette* の東南アジアに関する記事を調査することで、19 世紀末、イギリスの植民地あるいは交易の範囲内で、広く東南アジアに関わる情報が

流通していたことを確認した。

令和元年度は、研究発表「スティーヴンソンの南海諸島:「瓶の小鬼」と「声の島」における貨幣と魔術」(オベロン会、9月28日)を行った。これは、8月末から9月初頭にかけて行ったロンドン(British Library)とエディンバラ(National Library of Scotland)での研究成果の発表である。スティーヴンソンが南洋諸島を舞台に描いた「瓶の小鬼」と「声の島」について論じ、そこで西洋が魔術的なもの・貨幣的なものとして隠喩的に描かれ、東洋に悪をもたらすものとして表象されていることを明らかにした。また、第58回日本シェイクスピア学会(鹿児島国際大学、10月5日)に、研究発表「ブルーム『アンティポディーズ』における旧世界と新世界 — マンデヴィルの危険な女たち」を行い、17世紀のイングランドにおいて、対蹠地(アンティポディーズ)としての島々が、どのようにえがかれているのかを論じた。その際、中世以降ヨーロッパに流通し、人気を博していたジョン・マンデヴィルの『旅行記』を補助線として用いることで、新大陸の発見後、東洋の島々はイングランドにとって、馴致可能な場として想像されていたことが明らかになった。さらに、この発表を『オベロン』第73号に「ブルーム『アンティポディーズ』における旧世界と新世界 — マンデヴィルの危険な女たち」として掲載した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松田幸子	4. 巻 37
2. 論文標題 ブルーム『アンティポディーズ』における旧世界と新世界 マンデヴィルの危険な女たち	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 オベロン	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 キプリングの東南アジア：“The Lang Men o' Larut”（1889）を読む
3. 学会等名 オベロン会9月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 キプリングとCivil and Military Gazette
3. 学会等名 キプリング協会第20回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 ブルーム『アンティポディーズ』における旧世界と新世界 マンデヴィルの危険な女たち
3. 学会等名 第58回シェイクスピア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 スティーヴンソンの南海諸島：「瓶の小鬼」と「声の島」における貨幣と魔術
3. 学会等名 オベロン会9月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 ブルーム『アンティポディーズ』における空想の旅と病
3. 学会等名 オベロン会3月例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----